

「地域で暮らすという事」 その2

ゆるくない話

たすけあいワーカーズ「むく」代表
石川 絹子

四月一日に介護保険制度が施行されたが、厚生省の調べによるとわずか二週間あまりで二、三五六件の苦情が自治体に寄せられたという。また、五月一日には新聞各社が一斉に「介護保険施行一ヶ月」という特集記事を載せていたが、まだまだ制度についての情報不足があるようだ。さらに、匿名での苦情や相談が目立つともあった。実際に在宅や施設で介護保険のサービスを利用されている方にとっては、名前を明らかにするということは「異議申し立て」にもなりかねず、引き続き利用しなければ生活ができない実情があるので我慢しているのかなと思う。これでは制度が変わっても、

弱者という立場が依然としてあるのだと思う。

苦情や相談の内容としては、介護保険の基本的な情報のほか、要介護認定を受けたけれど居宅介護支援事業者（ケアプラン作成事業者）や介護サービス計画（ケアプラン）にもとづくサービス提供事業者をどんな基準で選んだらいいのか判らないという声が多く寄せられたようだ。

他にも、今まではサービスを受けていても行政による措置だったので、料金を負担するということがないことがあまりなく、一割自己負担というのは経済的な負担が大きいうので、そのため介護給付内であってもサービスをひ



石川 絹子 (いしかわ きぬこ) さん

南富良野町生まれ。

釧路赤十字看護専門学校卒業後、臨床・診療看護婦となる。

1994年たすけあいワーカーズ「むく」を設立し代表となる。

1999年10月たすけあいワーカーズ9団体による「NPO法人北海道たすけあいワーカーズ」の代表理事に就任、現在に至る。

介護保険制度における「指定居宅サービス事業者」の指定を受ける。4月より施行される介護保険制度に向けて、利用者・家族等のニーズに即応した、よりよいサービスの提供体制整備の確立に邁進中。

かえなければならぬと
いったこともあるようだ。

七月に入って、介護サービ
ス計画の見直しが始まり、
計画の中に利用する方の願
いや意思が反映され「これで
ひと安心」と思えるように
なっていくってほしいが、いか
せんまだまだ生まれれば
かりの「介護保険」、ゆるく
ないと思われる。

ところで、わたしは移動の
ためにはなるべく公共交通
機関を利用するようにして
いるので、何気なく廻りの人
を観察するのが好きだ。高齢
者の方々の様子に関心があ
るので、気をつけて見ている
と色々なことが見えてくる。
バスの中とか、病院の待合室
とか、様々な所でハッとさせ

られたり、面白かったり、感
心したり…。

中でも病気や体調に関す
ることはなかなかで、「久し
ぶりだね。きょうは病院か
い？」というバスの中での会
話。ふたりは目的地に着くま
ですっと病気の話をしてい
た。病気で辛いのは自分だけ
じゃないという安心(?)が
案外病院の薬より有効かも
と思ったりした。病気自慢や
不幸自慢はマイナスに思わ
れがちだが、長い人生を生き
てこられたのだから、辛いと
苦しいことは沢山あった
だろうし、体だつて酷使して
きたのだから、あっちこっち
悪くなつてあたりまえ、金属
でできている機械だつて何
十年もは使えないのだから。

病院で小耳にはさんだ話

は小咄のようだ。「久しぶりだね。今日は血圧かい?」「うん。そろそろ検査してもらわないと薬がもらえなくなるしね」「ところでさ、最近〇〇さんみかけないけど元気にしてるかい?」「それがさ、風邪ひいてさ、インフルエンザだと。それで家で寝ているみたいだよ」「そうかい。そりゃ大分悪いんだね」。病院に通って来れるのはまだ元気なするしかもしれない。近所のこと、病気や病院に関すること、さまざまな情報交換をしている。

目的地までせかせかと急いで歩いていては見つけられない物や出来事がある。中には時々勇気を出して注意

をした事に遭遇する。

先だって、所用のため千歳空港まで列車を利用した時のこと、平日の早い時間帯で、出張と思える男性も多く、混んでいた。運良く座る事ができたわたしは、早速人物ウオッチングを始めた。すると、わたしの前の席が空いているにもかかわらず、その横の通路で本を片手に働き盛りと思える方が立っていた。勇気を出して「あなた、おとなりの席が空いているなら、鞆をといたらどうですか。混んで立っている方もいるんですよ」と後ろから声をかけてみた。二人分の席を独占していた海外旅行にいくと思

われるその女性は「鞆を置いているから空いてません。床

に置いて、列車がゆれてドア

や窓にぶつかったら危ないでしょ。そうだったら責任とってくれるの」といわゆる逆ギシでどなられてしまった。近くにいた方たちは皆、目を丸くしていたが、もちろんわたしも開いた口が閉まらず、心の中では「じゃ、あなたは二人分の乗車券を払うのか」と思いつつ何も返せなかった。勇気を出したおせっかいも、なかなかゆるくないと痛感した。

わたしのまちに、時々利用させてもらっているお店がある。ご年配の女性客が多く訪れるので、いろんなお話を伺う事がある。「夫が入院してて、もうじき退院するんだけど、これから二四時間

介護に追われるかと思うと

辛くなるよ」との話。「介護保険で認定を受けて、ヘルパーさんや看護婦さんに助けてもらおうといいよ」とわたし。そこから介護相談が始まり、お茶をいただきながら、話は拡がる。ところで、このお店は喫茶店ではなく女性服のお店だ。店長さんはわたしと同世代で、彼女の手柄に引かれてやってくるお客さんはついつい長居してしまうというわけで、わたしもその一人だ。

友人が古い空き家を改造して喫茶店を始めたので訊ねてみた。手作りのケーキと軽食のお店だが、多くの女性客が訪れているようだ。彼女は「女の人気が楽に入れるよ



公演でパークゴルフを楽しむ人たち

うな喫茶店ってなかったのよね。それも、おばさんといわれる年代の女性がちょっと寄ってみようかって思うような店にしたかったの」と話してくれた。住宅街の中にあつて目立たないが、ほっとする空間が確かに存在している。

利潤や経済性を追求しない、こんなのが自分のまちにあつたらいいなを仕事にする。そんな女性たちが創りだす仕事は時間や空間を創りだす仕事かもしれない。「つぎ、儲かっている?」と聞かれても「ほちほちなかなかなかゆるくないっしょ」と答えるしかないけれど、そんな働き方(仕事)が、わたしが二十一世紀に持ってゆきたいモノのリストの一番目に

ある。

長引く不況、終身雇用の崩壊、停年後の再就職もままにならない近頃。出かけてみた公園ではご隠居さんと呼ぶにはまだ若い男性たちが、平日にもかかわらずパークゴルフをしていた。その背中に向かつて、「あなたを必要としている仕事があるんですよ」と声を掛けたかったが、新卒の宗教勧誘と思われるも困るので止めておいた。自分が住むまちにあればもっと暮らしやすいくなる仕組みを「利潤をあげることをのみを目的とせず、地域住民の利益を優先する事業」として起こしてみませんか、仲間になりませんか、と言いたかったのだが…。